

フィリピン研修参加報告書

京都大学文学研究科修士1年 名前 黒田麻耶

フィリピンという国は私にとって遠い存在でした。前期に移民受け入れについて学び、また過去に日本で働いていたフィリピン人女性と日本人男性の間に生まれた子達（JFC）への学習支援を行うにつれて、その距離感は徐々に縮められていきました。それでも実際にフィリピンの方々はどのように暮らし何を思い、何故日本への移民という選択肢を選び、どのように生きていくのかを知りたく、今回の研修に参加しました。

フィリピンに降り立ちます初めに驚いたことが、人の多さです。私は海外渡航の経験も少なく、ましてや発展途上国を訪れたことは初めてで、昼間から道ばたで何をすることもなくたむろする人、敷物を敷き横になる人、雑然と窮屈に並ぶ建物、交通法規が整備されずただただ渋滞が続く道路。すべてが私にとって衝撃の連続でした。

人の多さはフィリピンを語る上で避けられません。国内での労働需給のバランスは崩れ、労働力は余り、賃金も低く、フィリピンから日本へと渡航しようとする人たちは口をそろえて「フィリピンで働いても生きていけない」と言います。アメリカ領であったことから英語が堪能なフィリピンは、アジアでいち早く労働力の送り出し国として成功しました。移民という形で外貨を得ることに成功したため、国内の産業は発展せず、世代が変わっても移民として海外に働きに出ることしかできないと言います。

これから渡航予定の方々に訪れる先として日本を選んだ理由を聞くと、結婚移民の場合は多くが「日本に住む auntie の紹介」と答えます。ここでの auntie とは親戚よりも広義のおばさんだそうです。すでに日本へ渡航済みの知人から紹介を受け、彼女たちは年齢が20も、時には40も離れた日本人男性と結婚します。お互いの言語が通じないなか、ネットでやりとりをし、数度面会し、多くを話し合わないうちに入籍します。CFO（commission on Filipinos overseas）で夫婦間の摩擦を減らすために言語の習得は必須だといわれても、多くの女性は日本語を全く話せず、夫のことをほとんど知らず、日本での労働の意志はないのに母国への仕送りの意志があるなど、「日本にいけば幸せになれる」という無計画さが垣間見られたことにショックを感じました。彼女たちはフィリピンでの生活と比べ裕福になるかもしれませんが、JFCの子どもたちの苦しみを間近で見てきたために、将来生まれてくるだろう子らの語学や文化面でのサポートの必要性を痛感しました。

また今回の研修では日本での労働をめざして日本語を学ぶ研修学校にも訪れました。軍隊のように規律が厳しく、時間の流れが緩やかなフィリピンで一昔前の日本に来たかのような錯覚を覚えるほどでした。勉強はつらいと口々に彼らは言いますが、それでも日本で働くことを強く夢見ています。日本人の校長先生は彼らを商品として完全なものにして日本へ届けるといいました。この物言いは一見冷たく感じますが、自分の生んだ商品として彼らが日本で不自由しないように自信をもって届け、面倒を見るのだと力強い姿に何か心動かされるものがありました。日本の特に工場のような規律が厳しいところに適応するには、根底から彼らを変える必要があります、それを怠ると工場だけでなく彼ら労働者にとっても負な結末があるといい、実際にフィリピンの緩やかな空気感を体感した私には何も否定することができませんでした。

この研修を通じて背景にある構造を体感したことで、移民についてより深く知れたように思います。同時に今後増加するだろう移民2世の問題にも関心をより深くもちました。現地に赴きそこで生活をし、実際の生の声を聞き、まだ消化できないたくさんの感覚を得ることができました。この感覚がまだ何かわかりませんが、今後学習を通じて問題に取り組みたいと思います。